

公益財団法人ハイライフ研究所

連載インタビュー／都市の未来とライフスタイルの創造

第4回

クオリティ・オブ・ライフを実現する ランドスケープ・アーバニズム

インタビュー 杉浦榮氏 (ランドスケープ・アーキテクト S2 Design and Planning 代表)



横濱万国橋SOKOの新しいオフィス

司会：今おじゃましてこのオフィスは、倉庫のような建物で、明るく、眺めが良く、心地良い空間ですが、ここに決められた理由はどの様なところでしょうか。

杉浦：環境とか地域の特性を活かす仕事をしていますので、何か自分たちの姿勢や考え方を反映できるような場所をオフィスにしたいと考えていました。最初は、都内の倉庫や工場とかをメインに探していましたが、横浜市が「クリエイティブシティ」というコンセプトで、クリエイティブ系のオフィスを中心市街地に集積して地域の活性化に繋がりたいとい

う政策をもたれているという話を伺いました。実際、ここ万国橋S O K Oはかつて海運倉庫だったものを改装してオフィスにしています。ここを訪れた時に、この海に面したロケーションと都内ではないような開放感とか空間性が気に入ったので、ここにしよう決めました。

この万国橋S O K Oでは、一年に一度、入居企業の活動成果の発表や社会へのメッセージの発信を行うことを目的として「横濱万国橋覧会」を開催しております。映像照射をしたり、カンファレンスを開いたり、ライブを行ったり、カフェをやったりとか、皆さんに来ていただく機会を作っておりますので、その時には、是非いらして下さい。

ランドスケープ・アーキテクト、アーバン・プランナーの職能と活動

司会：杉浦さんはハーバード大学建築学部大学院を卒業され、ランドスケープ・アーキテクト、アーバン・プランナーとして、様々な活動をされていますが、どういう職能なのか、またどのような仕事なのかを聞かせて下さい。

杉浦：ランドスケープ・アーキテクチャーをそのまま訳すと「風景を建築する」ということになって、日本的な感覚からすると風景を建築なんか出来るのかと思われるかもしれませんが、基本的には、「環境の中で人間が生存していく状況をどう創っていくのかを計画・設計する」ことです。例えば、「何処に行ったら食べ物を得られるか」、「どういう所にいると安全なのか」といった、「人間が最初に生きていく環境を求めた時に何を取舍選択するのか」、あるいは「住みやすい状況に環境を改善するにはどうするのか」などを、今の時代の中で、どの様に環境と対峙しながら考えていくのかという立場であり分野なのです。

司会：もう一つの職能であるアーバン・プランニングということは具体的にどのような仕事なのでしょう。

杉浦：アーバン・プランニングは、日本語で言うと都市計画になります。アーバン・プランニングは、19世紀、20世紀に入ってから、人間が生存する大きな場として都市が発展していく中で、専門的に特化して生まれた職能分野ですので、ランドスケープ・アーキテクチャーの延長線上にあるものだと私は思っております。

司会：杉浦さんは、現在、具体的には、どの様な仕事に取り組まれているのですか。

杉浦：例えば、都市の再開発などの場合、その地域が置かれている状況を把握し、どの様な構想を立てたら良いのかといった全体を提起すると同時に、その再開発の中でパブリッ

クとのインタフェースになる公共空間ですとか、あるいは景観的に重要なファサードなどを具体的に設計する仕事をしています。他には、例えば、自然が多い環境に立地する企業の施設や工場などを、それぞれの環境の良さを活かしながら、“企業の理念を表す”というコンセプトの元に設計する仕事もしております。

司会：ということは、標準化されたデザインではなく、土地の歴史や風土、そしてその土地のそれぞれの文脈に係わるようなデザインをされているということなののでしょうか。

杉浦：私達は、どの様なプロジェクトが来ても、まず、最初にプロジェクトが発生する場の状況をかなり詳細に確認していきます。つまりその敷地の中だけではなく、そこを含む非常に広い環境特性を様々な要素に分けて抽出し、その場がどの様な特性を持っているのかを把握し、そしてそれをひとつの潜在資源と考えて、その潜在資源をうまくプロジェクトに活かしていくような、“空間”であり、“場”を創っていきます。

ハーバード大学建築学部大学院の特徴

司会：杉浦さんは、ハーバード・デザインスクール（ハーバード大学建築学部大学院／GSD）で学ばれていますが、日本の建築の世界とはどの様なところが違うのでしょうか。

杉浦：ハーバード・デザインスクールの場合は、非常に特徴的な方向性に向けて教育システムが組まれているのではなく、一般的な、いわゆる王道と言われる教育システムを持っていると思います。先生もアメリカ人だけではなく欧州やアジアなど世界中から、評価されている人達を呼んできて、現在、高く評価され、今後も伸びていくと思われる考え方や方法論を広く学び、デベロップしていくといった様なことをやっています。

学生も、大学からそのまま来た方もいますが、もう既に自分の事務所を持たれていたり、公的な機関で専門分野に係わっていた人とか、あるいはアートとかの分野でそれなりのスタンスを確立して、ある種のキャリアチェンジとか、また、幅を広げるということで来られている方もいらっしゃいます。非常に多岐にわたる学生さんがいて、そういうダイナミックスの中で、自分のやっていく方向とか位置づけを探れるという魅力があります。

米国の場合は、良くも悪くもプロフェッショナルスクールであり、専門性がある大学院ですので、あくまでも職能の向上を追求する場だと認識されています。来る学生もそれを期待して来ますので、教える方もプロとしての職能を実現するレベルでの授業や講座を設定します。

注目されるランドスケープ・アーバニズム

司会：杉浦さんが実践するクオリティ・オブ・ライフの空間作りなどで、ハーバードで学んだことを、どの様に活かしていますか。

杉浦：ちょうど先月、ハーバード・デザインスクールのアーバンデザイン学科の創立 50 周年記念カンファレンスというのがありまして、私も行ってきました。そこで議題になっていたキーワードが「ランドスケープ・アーバニズム」、または「エコロジカル・アーバニズム」です。私が在学していた 10 年ほど前から、その様なキーワードは出ていましたが、今も、大きく注目されています。

アーバニズム（都市化）と言う言葉は、ある時期、環境などの問題から離れ、都市機能をどの様に発展させていくかというところに集約されて語られていましたが、それをもう一度、環境や地域の文脈の中で、キチンと見直し、持続可能性と、それぞれの地域に特有のアーバニズムを追求していこうという考え方が再認識されています。それが、現在でも、またこれからの都市デザインにおいても、大きな潮流になっているのだなと感じました。

地域の文脈を紡ぎ出した富山県黒部市の「前沢ガーデン桜花園」

司会：地域の文脈を追求した具体的な事例は、どの様なものですか。

杉浦：地域の文脈を表現したひとつの事例は、富山県黒部市の Y K K の施設で「前沢ガーデン桜花園」です。Y K K さんからは、創立 75 周年記念事業ということで、何か地域に貢献できるような施設を作りたいというお話がありました。というのは黒部市では、新幹線が開通することもあり、ここ 20 年近く、新しい街をどう創っていくかを街づくり協議会の中で話し合っておられましたので、私達もその協議会に呼んでいただいて、黒部市自体の都市機能をいかに再編していくか、また、地域の良さをどうアピールしていくか、といった話をしました。そしてそうしたまちづくり活動に対し、その施設が黒部市で新たな機能を果たすためにはどうしたら良いのかなどを主旨に、「前沢ガーデン桜花園」のプログラムを煮詰めていきました。

司会：前沢ガーデンの中にある前沢ガーデンハウスは、Y K K の国際スタッフの寮として作られたとのことですが、企業や黒部市が世界に対してメッセージを送るという視点もあったと思いますが。

杉浦：前沢ガーデンハウス自体は、25年ほど前に、建築家の槇文彦さんが設計をされました。YKKは、その敷地を含む10畝ほどの土地を前沢ガーデンと呼んでおり、その中で、特に75周年ということで、地域の自然の良さを象徴的に体験する場として集約的に整備したのが桜花園なんですね。元々その土地を購入された時に、YKKも国際企業ですので、地域の若者達と、様々な国の方、また実際に海外で働いている方もいますので、そうした世界の人々と交流できるような場として創りあげたいという思いがあって、その思いの長い文脈の上に、少しずつその場を創り上げていっているということだと思います。

司会：地域の謎解きの視点として、また地域を新しく再編集していく手法として、杉浦さんは、「軸」という切り口を活用されていますが。

杉浦：「軸」という言い方をしているんですが、「軸」そのものが見えるわけではなく、周辺の大きな環境の特性を拾い上げ、その地域を象徴的に表している方角や風景などの要素や方向性を見出して空間を設計していく方法論として設定しています。

実際に回遊していただくと、例えば、ある動線の流れの中で、ぱっと海が開けて見えたり、丘に上がって行った時に立山連峰がぱっと見えてくるとか、黒部の良さを体感していただくための仕掛けを作るひとつの構成の論理として、「軸」というのを使っています。

司会：その地域の地下水脈を活用され、湧水のモニュメントを創ったとのことですが。

杉浦：黒部というところは、非常に水の豊富なところで、扇状地なのですけれど急峻な扇状地になっているため、水がたくさん湧いてくるような状況があるんですね。それが、アルミ産業とか地場の産業を支える理由でもありますし、実際にあの地域に行くと分かるんですが、平野から立山連峰の山並みがとても美しく見えます。そういう見え方をする所が他にはなかなかなくて、実は、その急峻な扇状地がその原風景を生み出しているんですね。そういったいろいろな意味で湧水というものが、地域の特性を表していると思いました。敷地の中にも水が湧いていましたので、それをそのまま使って、清廉な水をその場で体験していただけるようにと思い水盤を造りました。

司会：黒部市となると、やはり桜が有名ですが、その桜についてお伺いしたいのですが。

杉浦：実は、最初は、桜がメインのキーテーマではありませんでした。とにかく、地域の良さを体験していただく場にしようということで、ある程度構想がまとまってきた時に、何か、もっと分かりやすい、メッセージを理解してもらえるキーワードって何だろうと言う話が出ました。その時に、「桜」が出てきたんですね。

というのは、黒部川の流域では、桜の自生種が数多くあります。桜は、約3000種類ありますが、そのオリジナルを辿っていくと6~7種類くらいに集約され、その殆どが黒部川流

域に自生していて、黒部という場所自体が、桜が発生したオリジンとも言えるんです。ですから黒部市としても「桜」を街づくりにも活用し、「桜ワークショップ」というものをここ20年程、続けてきました。ですので「桜」をキーテーマに持ってくるのは、街の人にも理解しやすく分かりやすい手法ということで、YKK社の意向を請け、桜をメインに持ってきたわけです。

司会：「桜花園」は、地域の方とか外部の方とかへ解放しているとのことなのですが、皆さんの反応はいかがですか。

杉浦：毎年、桜の開花期には、一般開放や夜間解放をして、皆さんに楽しんでいただいております。それから、去年の桜の季節には、全国で桜を街づくりに活用されている市町村の方が集まって、「桜シンポジウム」全国大会が黒部で開かれました。桜花園は、こうした活動にひとつの役割を果たしているのかなという気がします。

いつも特別な行事が用意されているわけではありませんが、この施設は、自然のまま、あるままの状態の中から、地域の人に一緒に育てていただき、長い時間をかけて地域に根ざしていくことになれば良いのかなと思っております。

司会：前沢ガーデンは、経産省グッドデザイン賞と日本建築学会北陸建築文化賞を受賞されましたが、その受賞理由はどの様なところでしたか。

杉浦：選評では、その地域の環境特性を空間化したことに評価をいただきました。そしてそれが、建築、土木、ランドスケープと領域を分けるのではなく、周辺環境とも渾然一体となって地域の特性を表現した空間になっているということが、評価をいただいた理由かと思っております。

これからの地方及び成熟都市の新しい再生

司会：人口縮小時代に向けた地方や都市のダウンサイジング化が議論されていますが、どのようにお考えになりますか。

杉浦：日本を始めとして先進諸国は、これから人口が減ってきますので、これまで肥大化した都市が、逆にダウンサイジングする傾向にあると思います。その中で出てきた概念がコンパクトシティとか、米国ですとスマートグロースです。しかし、ダウンサイジングしていくスキームが圧倒的にデベロップされておりませんし、まだ前例も少ないので、これがこれからの大きな課題だと思います。そして、そのスキルをどうつけていくかが、先ほど話したランドスケープ・アーバニズムの課題でもありますし、また、個別の状況に上

手く対応してどの様に環境との共生関係を見つけるかが大きくクローズアップされている気がします。

司会：米国の場合ですとダイナミクス化の事例がありますが、日本の場合はいかがでしょうか。

杉浦：日本の場合は、ある時期、コンパクトシティという考え方が広く広報されたと思いますが、ちょっと概念の扱い方を間違えたのではないかと思います。

本来は、必要とされる都市機能を分散させずに集約することにより、都市機能の効率化を図ると共に、不必要なスプロール化を防ぎ周辺の自然環境を保全するという考え方なのですが、過疎化している地域にある機能を中心都市の方へ移すという捉え方をされてしまったので、日本の中では、「過疎化した村は捨てられるのか」という違う議論を起してしまったのではないかと思います。

それは、日本独特の地域のあり方をきめ細かく見て対応していくという方法論ではなく、ある程度マスタープラン化された欧米のコンパクトシティの概念をそのまま持ってきてしまったが故に起こるミスマッチ、あるいは、不適合を起こしてしまったのかなと思います。

司会：日本の場合、地域、特に、中間村地域や地方都市の活性化の問題が大きいと思いますが、また一方成熟化した都市の問題もあります。この点についてはいかがですか。

杉浦：私共の方にも、地域活性化のお話を多く頂きますが、一番問題になっているのは地方の中心市街地の活性化です。どんどん郊外にお店や住宅が移ってしまい、中心市街地が歯抜け状態になって都市としての機能を失って、どう再生できるのかということが問われています。しかし、紋切り型で型通りの再開発をしても真の活性化には続いていかないと考えますね。地域独自の再開発や活性化のあり方、それぞれの状況に合わせて考えていかないと持続的に機能するものにはなりません。

私たちが手がけた案件で、長野の「トイーゴ」という中心市街地の活性化の再開発がありますが、その時にも長野の地域特性を詳細に洗い出し、それを強みに変えるような再開発のあり方は何なのかと考える中で、そうしたコンセプトを個別の計画とか設計に落とし ていきました。

司会：長野の「トイーゴ」の事例では、街のカタチ、人の流れなどは変わってきたのでしょうか。

杉浦：私達が、最初、その場所に行った時には、人が殆ど歩いていませんでしたが、竣工後は、人通りができ、お子さん達が広場で遊んでいました。また、「水路地」と呼んだ歩

行動線を整備しましたが、そこは、元々、水脈が通っていた跡が、路地みたいに残っていて、不法駐車やゴミ出しのスペースになっており、完全に“裏”になっていたところなんです。そこを積極的に歩行空間化していくことにより、駅からの人の流れとか、市内の各スポットへの流れを作っていきましたので、そういったことによって回遊性が生まれたのではないかと思います。

司会：地方都市が発展するためには、地元の人だけでは新しい価値観が開発されにくいと思いますが、経験的にいかがでしょうか。

杉浦：地方の問題が解決されないひとつの理由に、その地域にずっと住んでいるらっしゃる方は、その良さとか問題点が、実は、はっきり見えなくなっていることが多いんですね。自分達は、ずっと住んでいるからその場所を良く知っていると思われて、客観化できない状況になっています。例えば、私達が行って、「こんなに良いことや、こんな特性がある」と言っても、「そんなのは別に当たり前だし、面白くも何ともないですよ」と言う反応をされます。その地域に居る人にとっては当たり前でも、引いてみた時にそれが特性になったり、メリットになることに気がつかないままに放置されていたりします。逆に、これは問題だなということが、もう見慣れていて気がつかなくなって、そういう意味で、外からの目線や刺激を受け入れることが重要で、それが活性化のきっかけにつながると思いますね。

アートの街として再生した「ビルバオ」

司会：街や都市の新しい再生スタイルとして、例えばスペインのビルバオのように衰退した都市が再生した事例もありますが、その点についてはいかがでしょうか。

杉浦：それは、本来その地域が持っている特性をうまく生かして再生に繋げている事例だと思います。ビルバオは、産業構造が変わり、経済的にも逼迫し、人口も流出し衰退していく中で、もう一度、地元の特性や強さはいったい何なのだろうと考えていくんですね。

その中で、鉄鋼や造船の町だったというテクニカルな面をアートとしての街づくりに昇華していく事を考え、象徴的なグッゲンハイム美術館を創ったり、著名な建築家に橋を設計してもらったり、地域の良さを表現していくパーツを街の中に導入していきました。結果として、街全体がひとつのミュージアムになり、それを見るために世界中から何百万人もの方が訪れるようになったんですね。彼らが自分たちの持っている良さを見直したからこ

そ出来たのであって、他の人気都市の真似をしようとしたら、決して成功していなかったと思います。

司会：日本の地方都市の中には、昔は企業城下町、あるいは産業の街として栄えた街が多くありますが、その様な地方都市の再生の可能性については、いかがお考えになりますか。

杉浦：可能性はあると思いますね。日本はやっぱり歴史的な文脈とか文化的な蓄積の多い国ですし、四季の変化もあり、地形も複雑に入り組んでいるので、地域独特の環境が個別にあると思います。日本みたいな小さな国で、北に行くと雪が降っていて、南に行くと泳げてしまうという所は、なかなか無いんですね。小さい国の中に豊かな環境がぎゅっと凝縮されている場所なので、それぞれが持っている特性を考えていけば、自ずと差別化できるようなやり方が、必ず浮かび上がってくると思います。

肥大化する都市の新しい動向と問題点

司会：縮小地域や成熟都市とは対極にある、上海やドバイなどの肥大都市、沸騰都市についてはいかがでしょうか。

杉浦：中国や中東、最近ですと南米などからも話があって、実際プロジェクトに参加して感じることは、今まで先進諸国が起こしてきた同じ間違いを繰り返してはいけないということです。

しかし、それらの地域や国で実際、行われているのは、とにかくCGなんかでマスタープランを作成し、早く完成した絵姿を見せてくれと言われることが多いのです。しかも、その通りに、どんどん造っていってしまうんですね。それに経済活動がついてきて発展しているという状況なのですが、それは非常に危なくて、先日のドバイショックのように金融などでつまずくと、一気に崩れてしまう危うさがあります。

環境共生型開発のキーワードとして、国際基準のLeed（環境配慮型不動産基準）とか、国内だとCasbee（建築物総合環境性能評価システム）と言う基準があり、新しいプロジェクトでは、その基準を満たすことを要請されることが多いのですが、形だけのものになっている場合が多く、それらが本当に持続可能な開発の指針になっているかという疑問な点があります。やはり、その開発地それぞれの特性を踏まえた、個別の開発計画が立てられる事が必要です。でも、そういう所では、外から来たプロフェッショナルな人達が、今まであるひな形の中から、その土地とは関係のないマスタープランとかランドデザインを造ることが起こりがちなので、それはとても危険なことだと思います。

司会：ドバイなどは、昔は砂漠でしたが、今は、ある意味大都市になっておりますが、時間が街を成熟させる、成長させるという見方があると思いますが、その点についてはいかがですか。

杉浦：それはあると思います。ただ、それだけコントラストのある開発を行うということは、かなり環境に負荷がかかっているのです、潜在的なインパクトの大きさを自覚した上で、それに対する対処法を持って、行ってもらいたいと思います。ですが、そこまではなかなか行わないで、立ち上げる方が先になってしまうところを感じますね。

司会：現在の開発は、様々な国と地域によって違うと思いますが、現実的には、均質的な開発傾向になっているのではないのでしょうか。その現状と問題点についてはいかがですか。

杉浦：均質化は、20世紀に入ってから今までの歴史の中で進んできた大きな流れだと思います。先進国のプロフェッショナル達が、発展途上にある地域に行き、都市開発を行ったり、ランドマークとなるような建築物を設計したりしていますので、その中で、インターナショナリズム、ひとつのグローバルスタンダードというものを、いろんな場所に創っていったということもありますし、経済や情報のグローバル化がある意味での世界の均質化を促進したという側面はあると思います。

インターナショナルなプロフェッショナル達が、地元の人には気付かない視点を持ち込む事は良いことだと思いますが、彼らがその地域の文脈に敬意を払わず、好き勝手なことをやったとしたら問題です。時として建築単体として素晴らしいものになる場合もありますが、それが地域に於いて機能するものになっているかどうかは、別の問題だと思います。

環境対応は個別の全体最適を目指す

司会：環境に配慮するということで、グリーンアーキテクチャー、スマートグリッドなど新しい概念をとり入れていますが、どの様にお考えになりますか

杉浦：そういうことを考える際にも、やはり、全体系として機能するかどうかをもっと考えなくてはいけないと思います。単体のグリーンアーキテクチャーだけで環境が変わるのかというと、その個別の建築が影響する範囲では変わりますが、それより周辺的环境インパクトの方が圧倒的に大きいので、それとの関係性に於ける全体系の部分として機能するグリーンアーキテクチャーというものは何なのかというものを考えないといけないと思います。

今、スマートハウスが開発され商品化されていますが、現在の段階では、単体、即ち住宅一戸単位で環境に配慮したスマートハウスになっています。が、個別の住宅を考える以前に、住宅地として開発した時に、全体計画としての配置や造成や植栽等も含めて、それらが一体として環境に即したものになっているのかどうかの方が、実は、影響が大きいんですね。その様な全体最適が問われていないと本当の意味での、環境共生とか環境に配慮した開発につながっていかないと思います。

快適な生活品質と生活空間を創る

司会：我々が住んでいる都市空間、生活空間をこれからより快適に創り上げるためには、どの様にしたら良いとお考えになりますか。

杉浦：やはり、それぞれが持っているその地域の特性や環境の良さをキチンと見直して、それを上手く次の時代に活かしていくことだと思います。但し、昔と同じものを創っても全く意味がないと思いますね。それは、その前の時代に成立したものであって、今の時代には成立しなくなっている。つまり、場所や空間のコンテキストを考えると同時に、時間のコンテキストも考えていかなくてはいけないと思います。先ほどのビルバオのように、その前の時代にあった良さを次の時代にうまく生かして解釈し直し、新しい価値観に変えていくことは出来ると思います。そういうことをきめ細かく行っていくことが大切だと思います。

司会：我々の生活空間には、都市と農村との密接な関わりがありますが、環境に対する配慮も含めたその有機的な連携については、いかがでしょうか。

杉浦：都市のあり方と農業のあり方は、密接に関わり合っていると思います。結局、都市を支えるベーシックな資源である食料の生産は農業に負っており、農業だけを考えていてもダメで、都市を考える時にも、都市を支えている農業とかそのバックグラウンドになっている基盤をどう整備していくかを同時に考えなくてはいけないと思います。

最近、農業に新しい動きが出て、見直されているのは面白いと思いますね。ただ、農業＝エコではないと思います。例えば、今、里山の風景みたいなものが見直されていますが、エコロジーの視点から言うと、本来はもっとぎゅっと凝縮したところに人が住み、手を付けない自然が多く残っている方が、環境保全的には良いわけです。

農業も1年サイクルで見ると循環型の産業ですが、それを非常に長期で見た場合には、土地の資源を農作物が搾取していきますので、いつか限界が来る。ですから、農業は土地

資源を消費している産業だということを認識した上で、環境を考慮した長期的に持続可能な循環型農業を考える必要があると思います。

そして、農業だけでなく、私達が自然と共生するためには、人類時間上でも既に地球資源の限界が見え始めているので、型通りのエコではなく実体を伴った形で、それぞれが置かれている環境との関係を再認識する必要があり、そのきっかけや場が求められていると思います。

司会：時代の変化と共に、我々の生活も変わってきますが、これからの我々の生活品質（クオリティ・オブ・ライフ）を向上させるためには、都市のデザインをする中でそれをどの様に実現していきますか。

杉浦：個々人の生活で言うと、時間的にも経済的にも余裕があって、個人の選択肢がいろいろあると言うのが、一般的に豊かな社会だと思われています。しかし、その様な状況を保っていくためには、個人の生活だけを見ていてもダメだという事に、私達が気付く必要があると思います。

今までの都市や開発の考え方は、ベースとなっている地球という資源は無尽蔵だという前提で、その様なことを考えてこなかった。むしろ、どんどん発展していくとみんなが幸せになっていきますよ、というスキームだったのですが、実は、それは限界がある方法論だったのです。ですから、それを違う形でどう実現していくのかということ、**「エコ」**とかのファッション的なキーワードとして考えるのではなく、もう少し実感を伴った形で考えていくきっかけを創っていく事が必要なのかなと思います。

司会：我々の生活機能は外部化が進み、生活空間やコミュニティまでも他に依拠するということが行われてきましたが、これからの動きはどうでしょうか。

杉浦：コミュニティというのは、元来、それぞれを構成している人達が参加して自治しているものがコミュニティだったと思うのですが、それがある時期から形骸化してきました。例えば、一般市民が本来自ら行うべき事を行政が全部やってくれるものだと期待して行政に預けてしまったり、あるいは、マンションなどでは、管理組合はあるけど実際の管理運営は管理会社がやっているという事例も多くあります。結果として、コミュニティとか、私達自身が持っていた自治の選択肢の幅を自ら狭めてしまってきたという面がありますので、これからもう一度、それらを取り返していく、そして参加していくことが必要なんじゃないでしょうか。

司会：地域、あるいはマンション居住などの場合、生活者自身がコミュニティに積極的に参加しようという動きはあるんでしょうか。

杉浦：管理コストを下げたいという現実的な問題から住民自治が進められる場合が、特に低予算型のプロジェクトの場合などにはありますね。でも、本質的な問題は、一人ひとりの生活者が自己意識で参加して、初めて住民自治といえるということだと思います。

例えば、私どもが設計した「コナヴィレッシ町田」という集合住宅では、住民の方が必ず中庭を歩いて出かけて行ったり、戻って来たりするように設計しています。ここでは、住民同士の活動や交流が活発ですし、中庭には管理が難しいといわれる水盤もありますが、いつもきれいに保たれています。管理のシステムではなく、空間の作り方として、中庭という空間を共有することにより、コミュニティの意識や関わりができて、住民相互のコミュニケーションが自然に行われていると思います。強制ではなく、そういう雰囲気というか、自然にそうなる環境を創っていくことが大切だと思いますね。

杉浦さんのこれからのワークスタイル

司会：話は変わりますが、杉浦さんの活動の舞台は、国内外問わず多方面で活躍されていますが、これからのワークスタイルについて聞かせて下さい。

杉浦：そうですね。あまり、日本とか世界とか線引きをしているのではなく、たまたま、私が日本人で日本に事務所を置いているので日本の仕事が多いのですが、これからは様々な場所とか状況を見て、出来るきっかけがあれば、いろいろな場で仕事をやっていきたいと思っています。そういう意味では、ひとつのプロジェクトの中でも、都市計画や開発構想的なこと、またそれが発展してのランドスケープや建築の具体的な設計、そしてその後の運営のプランニングなどにも関わっていきたいですね。全体を創っていく中で必要とされていることを行おうと思っていますので、我々の仕事は、ここからココまでと言う仕切りを立てるのではなく、全体として一貫した良い物を創るための「きっかけ」、そして「場」を作っていきたいなと思っています。

司会：クオリティ・オブ・ライフを実現するため、ランドスケープ・アーキテクト、アーバン・プランナーという視点から、お話を伺うことができました。ありがとうございます。

司会：縄文コミュニケーション（株）

福田 博

● **杉浦 榮**(すぎうら・さかえ) プロフィール

<現在> S2 Design and Planning 代表
ランドスケープ・アーキテクト
アーバン・プランナー

<教職> 関西大学工学部 非常勤講師
早稲田大学芸術学校 非常勤講師
浙江大学、昭和女子大学、武蔵野美術大学
青山学院大学、東京農業大学 他で、講義・講演など。

<学歴> ハーバード大学建築学部大学院 (GSD)
ランドスケープアーキテクチャ修士課程修了
ハーバード大学建築学部大学院 (GSD)
都市計画 (アーバンプランニング) 修士課程修了

<受賞>

2007年 経産省グッドデザイン賞 ニトリ社東京本部屋上庭園 「KAWARA」
2009年 経産省グッドデザイン賞 YKK75周年記念事業 「前沢ガーデン 桜花園」
2009年 日本建築学会 北陸建築文化賞 YKK50周年記念事業 「前沢ガーデン 桜花園」
他

<主なプロジェクト> (数字は竣工年または最終業務年)

2008 YKK75周年記念事業 地域貢献施設 「前沢ガーデン 桜花園」設計・監理
2006 長野中心市街地再開発事業 「トイゴSBC,WEST,Parking」まちづくり基本構想および公共空間等設計・監理
2006 ニトリ社東京本部屋上庭園 「KAWARA」設計・監理
2006 ソニー本社機能集約施設 「ソニーシティ」ランドスケープ設計・監理
2004 集合住宅 「コナヴィレツジ町田」業態計画、建築およびランドスケープ設計・監理
2009 さいたま新都心再開発事業 デザインアドバイザーおよびランドスケープ基本設計
2006 武蔵浦和駅第一街区市街地再開発事業 基本構想

- 2005 狭山市駅西口地区市街地再開発事業 基本構想およびデザイン調整業務
- 2002 関口ジスティックス整備構想 基本計画
- 2001 S 高齢者コミュニティ開発事業(仮) 業態計画および基本構想
- 2005 M 高齢者住居系施設建築計画 基本構想、基本計画、基本設計

<執筆>

- 2010 テキスト「ランドスケープデザインの歴史」世界コラム P84,P130 担当 (学芸出版社)
- 2010 「市街地再開発事業における良好な街並み形成に資する具体的な取組み方策の検討」(都市再生機構)
- 2003 「生きた「風土」からうまれる「風景」へ」(第11回都市環境デザインフォーラム)
- 2003 「"アーバニズム"とランドスケープの同義性」(平成15年日本造園学会)、他

- <学会・所属> 社団法人都市計画学会 社団法人日本造園学会 正会員
都市環境デザイン会議(JUDI) 正会員
米国ランドスケープアーキテクチャ協会(ASLA) 国際会員 等

- <オフィス> 名称 S2 Design and Planning
所在地 〒231-0002 神奈川県横浜市中区海岸通 4-24 万国橋 SOKO 4F
URL <http://www.s-2.jp/>